昭和三十二年七月二十五日
諫早大水害から五十年

大洪水は一瞬にして、人間の営みを奪い去った。

静かに人々の暮らしの中に
溶け込んでいる本明川。
その穏やかな、親しみある川が、
あの日、あの夜、豹変しました。
轟音をあげて、濁流が押し寄せる様は、
まるで地獄図。
山は崩れ、堤防は決壊し、
目の前にあるもの全てがのみ込まれるとき、
私たち人間は為す術もなく、
ただ呆然と立ちつくすしかありませんでした。
家を、学校を、橋を、そして家族までもを奪われ、
あとには、泥水に沈んだ無惨な街、それだけが残りました。
商店街の活気も、子どもたちの笑い声も、
人々の希望さえも、押し流してしまう自然の猛威。
この街の五十年前の真実がここにあります。

体験記 I

地獄

大塚あや子

水害後五十年ということで、私も経験者のひとりとしてこの記憶が薄くならないうちに記録として残してみようと思いペンをとってます。

あの日のことは絶対に忘れない鮮明な記憶として今でも残ってます。地獄でしたもの。

当時私は中学一年、中体連が始まったばかりの時で朝からすごい豪雨で足止めをくらってました。夜になっても雨足は衰えることなくますます強くなっていったのです。イナズマも雷も今まで経験したことのない豪雨でした。停電でまっ暗やみの中、私と母は台所の隅（当時私の家は現在の場所で食堂をやってました）でぼんやりと「ひどかねー」なんて他に交わす言葉もなく見つめてたところ足元にチョロチョロと水が来たのが最初です。夜八時頃だったと思います。

水が入ってきた、まず米びつを上にあげんばといってカウンターの上にのせたり、電蓄（ステレオ）を上にあげたり、そんなことしてる間もないんです。その水の早いこと早いこと。「二

悪夢の夜 七月二十五日

【諫早大水害の経過】

▼七月二十日　梅雨前線が九州まで南下。
▼七月二十二日　梅雨前線は突風、雷雨を伴い、九州南部へ南下。
▼七月二十四日　夜には北上。
▼七月二十五日　梅雨前線は九州中部にかかり、北松浦郡では雷雨、朝九時頃からは豪雨。諫早では南西方面から暖かい湿った気流が張り出し、それが前線と重なり、集中豪雨となりました。
◎午後二時に市は諫早水防本部を設置。
◎午後三時には本明川は警戒水位を超え三・五㍍高となり、非常サイレンを吹鳴。
◎午後六時五十分、一回目の避難命令サイレン吹鳴。
◎午後七時三十分、二回目の避難命令サイレンが鳴り響く。
◎午後八時頃になると、上流では山津波（土石流）に次々と田畑や家屋が呑み込まれ、すさまじい速さで流される大変な惨事となる。
◎午後九時三十分、本明川氾濫、三回目の避難命令サイレンが鳴り響いた直後、市内は停電し、一切の通信が途絶える。猛烈な雷雨で本明川は濁流となり川岸を破壊しながら市街地へと満ち溢れ、荒れ狂う濁流に流されていく家やそれにすがる人たちの姿が稲光で見え、助けを求める声が発せられていた。
◎深夜十二時この頃からようやく減水しはじめる。
▼七月二十六日　午前三時、市は応急救助対策を協議。

誰もが夕刻には止むだろうと予想していた

廊下に上げてある自転車、うつむくひまわり、傘を通して落ちる雨。このときほとんどの市民は、雨はこれが峠だと思っていました。

7月25日夕刻の旭町第一

しのびよる水魔

七月二十五日の氾濫する前の本明川。諫早神社付近から撮影。鳥居の前から飛び石があり、市民の日常の通路でした。泥水が激しく音を立てて押し流そうとしています。

夕刻の本明川。光江橋から上流を見る

階に逃げろ」の声で、階段を駆け上がりましたが、水の勢いは早く、私たちを一段一段と追っかけてくるんです。その時母が「あっケリーをつないだままだった」と言って（当時スピッツを飼っていました）二階から下り泳ぎながら犬のくさりを外しに行ったんです。全員二階まで避難したところ、水も、もう二階の畳を押し上げてます。ベランダづたいに二階の一番高いカワラの上に全員またがりました。真夏の暑い日だっていうのに大粒の雨に打たれた私たちは、寒さでガタガタ震えています。とその時、大きな音がして私たちは水の中にのみ込まれました。

これは私の家の前に住んでる人が見ていらしたままを記録します。

私たちが一番高い所にまたがっていた時、諫高の方向から流れてきた大きな家が、前道路をふさいだその瞬間、私の家が半分に割れて、渦を巻いて沈んだそうです。「あっ大塚さんたちは全滅だっ…」と思われたそうです。でも家の前はどんどん流れる川とは違ってそんなに流されてはいかないので、渦は巻いたものの一〇㍍くらいしか流されなかったんです。私の母は当時血圧の高かった祖母をしっかりつかまえて流されもがいたそうです。…屋根があったので浮力

昭和三十二年七月二十五日
諫早大水害から五十年

山津波が大地を奔る

二十五日夕刻からの激しい大雨で、山間部では地下にしみ込むことができず途中で飽和状態となった水が、地盤の弱いところを突き破り、一斉に地中より地表へと噴き出し山津波が発生しました。

急峻な傾斜をつたい、それまでとは違った大きな濁流となり、岩をも巻き込んで川道とは関係なく、凄まじい勢いで下流へと押し寄せました。

水害後の山の斜面にはこうした山津波の跡がいく筋も爪で引き裂いたように見られました。

美田の土をはぎとり、蛍橋を流出させた濁流が牙をむいて市街地へ流れ込みました。
蛍橋付近上空より。下が上流。8月6日撮影

泥海の中、家屋が人が

大量の濁流が平坦地に流れ込むと瞬く間に水が膨張する感覚で、二階に避難していても畳を押し上げる所もありました。全市が泥海と化し、この世の地獄図をまざまざと見せつけました。

でそこにつかまり浮き上がりました。その時祖母が、母の手をつかまえにきたそうです。母も祖母の手をつかまえて、片足を屋根にかけ半分流されながら「さあ！あがんしゃいあがんしゃい」とあげようとしても流れにどんどん手が離れていったそうです。そしてとうとう祖母を濁流の中に見失ってしまいました。

その場面を想像するとこれを書きながらも涙が止まりません。そして、そんな風に祖母を失した母は、ただぼうぜんと流れを見つめて「あー家もない、母親も失くした。自分もこの濁流の中に飛び込もうか…」ときえ思ったそうです。その時、私のことを思い出したそうです。「あや子は？」私はといえば、渦にのみ込まれた時、母とは逆の方向に流され互いに道を隔てていたんです。私も何かにつかまったところ、それが電線だったらしくビビッときたのを覚えています。屋根か何か板ぎれにつかまり浮力で浮き上がったところに、近所の人など、大勢の人がいらっしゃいました。その時、向かい側から「あや子！あや子」と大きな母の声がしたんです。そして、ガレキの上を手さぐりしながら渡って私のところまで来たんです。それだけでも今思うとゾッとします。よく流されなかったなあって…。

水害に強い造りが裏目に

本明川は古くから再三にわたり大水害に襲われ、川に架けられた木の橋はそのたびに流されていました。そこで、水害でも流されない橋を造ろうと、天保九年（一八三八）に石橋の建設がはじまり翌十年に念願の眼鏡橋が完成しました。当時、市民に愛され県の文化財とされてきましたが、石橋があまりにも堅固なために、激流でも壊れず、水の流れをせき止める堤防の形となって、眼鏡橋両岸の高城町、八天町一帯の民家は、濁流にのまれて人もろとも流れてしまいました。

押し寄せた流木をせき止め被害を大きくした眼鏡橋

それからどれくらい経ったでしょうか。寒さに震えながら無言でした。濁流をじっと見つめるばかりです。誰かが大声で「水が引きだしたぞー」その時の嬉しかったこと…どんどん引いていくんです。そのあとは、たくさんの方々にお世話になりました。その時お世話になった方々の恩は絶対忘れる事ができません。ほんとうにありがとうございました。

それからケリーは幸いにも無事でしたが、濁流にのみ込まれ流された祖母は、八坂神社の所にあげてありました。水は一滴も飲んでなかったらしいですが、血圧が高かったのでショックで亡くなったんでしょうね。

当時中学一年の時の担任の先生が、日高先生といってやさしい人でした。「生きてたのね」といってくださり先生手作りの服を何枚かいただきました。

なお、家はおろか、洋服一枚もなく全てを失くしましたが、今思えば、写真を失くしたのが一番くやしいです。私の母は、結婚して六ヵ月（妊娠三ヵ月）で主人を戦争で失くし、やっと苦労して築いた財と母親を、一晩で失くし、二度も地獄を味わった人です。

今年、八十八歳の米寿のお祝いを迎えます。

八天町の惨状。中央奥が泉町派出所

一夜にして地獄図

水害数日後の写真。流木堆積の状況が分かります。

潰れた家や流木が道路を塞ぎ、数日間は足場も悪く、人々を困らせました。水害の時はこのような光景が街中を覆って被害の酷さを物語っていました。水害後一週間は雨と水が減らなかったので、市民は膝まで水に浸かる生活を強いられました。

諫早郵便局付近。大型車も無惨な姿

体験記 Ⅱ

生後一ヵ月の娘を抱えて

池園美智枝

昭和三十二年七月、当時私は二十三歳。実家の赤崎で長女をお産して、一ヵ月が経った頃でした。

私たちが住んでいた辺りは、二十四日夕方頃からいつにない大雨が降り出し、あまりの雨の量に伯父さんが心配して、私たちを迎えに来てくれました。母と姉は家に残り、私は長女をおんぶして、十二歳の妹と九歳の弟の二人の手をしっかりつないで、近くにある伯父さんの大きな家へ向かいました。もうその時すでに、水はどんどん下流の方へ流れて、歩いて行くのも精一杯。あまりの大雨に途中、死ぬ思いをし、何度もくじけそうになりました。しかし、私はここでこんなことを思ってはいけないと考え直し、胸の中で神様、仏様に「助けてください」と祈りながら、伯父さんの家に向かったのです。

やっと伯父さんの家に辿り着くことができた時、みんなが泣きながら迎えてくれましたので、堪えていた涙が出て、言葉も出ず、ただ頷くだけでした。その

白いシーツが物語る親の愛

新橋より竹の下バス停方向を望む惨状。倒れかかった電柱の屋根付近に、白いシーツを巻き付けてあるのが見えます。家が危なくなったので子どもを抱いて屋根に登り、電柱にくくりつけたら、家がすぐに潰れたので、子どもは危うく助かりました。その時のシーツが、電柱に残っています。（写真□部分）

無情に降り続く雨

今の中央商店街、十八銀行より栄町商店街の状況。正面の映画館は当時の銀線劇場。（今の諫早中央ビル）水害後も降りやまない雨が諫早の街を冷たくのみこんでいました。

夜、みんなで体を寄せ合って、話したり、泣いたり、笑ったりしていたら、長女も出てこないオッパイをくわえながら、スヤスヤ眠ってくれました。妹弟も「姉ちゃん、良かったね」と泣いたり、笑ったりして私のそばから離れないでいました。

しかし、そうしている間にも雨はドンドンと降り続きました。二十五日朝を迎え、少し外が明るくなり、家の前を見渡すと、濁った水の中を色々なものが流れてきて、家々は上の方がちょっと見えているだけでした。伯父さんの家にも危険が迫っていたのです。それでも、雨はまだドンドンと降り続いています。私たちはみんな前の日から何も食べていなかったので、お腹がペコペコ。小さい子どもたちは、涙ポロポロで目は真っ赤。何でもいいから食べたいと泣くばかり。どうすることもできず、雨が小降りになって、誰か上の方から助けに来てくださるのをみんなで手を合わせて祈り、励まし合いました。

すると、上の方から「おーい、おーい」と大きな男性の声が聞こえてきました。赤崎町の若い人、消防団の人たちがたくさん、大きな丸タンボのイカダでおにぎりを持って助けに来てくださったのです。もうその時は嬉しくて、子どもたちはニコニコして

魔の手は病院までも

写真手前の屋根を破った跡が見えるのは、高橋病院の旧病棟です。当夜、患者・付き添い・医師・看護婦など七十八人が屋根裏に避難しました。最悪の事態を予想し屋根を破って備えましたが、四面橋左岸の道路が流失したために屋根から脱出することはありませんでした。

四面橋周辺の水害翌日26日朝撮影

陸の孤島となった街を八日間で結んだ

四面橋左岸の道路の流出による天満町の大被害が一目で分かります。諫早の入口の道路が決壊して救助もできないため、橋への仮道を八日で取りつけ、流失倒壊した家の片付けも終えて、復興にとりかかりました。

被害2ヵ月後の状況

おにぎりをいただき、みんな感謝の気持ちで涙を流しながら、「ありがとう、ありがとう」と言葉にしました。

雨はドンドン降っていましたが、みんなは何人かに分かれて消防団の人たちに手を引かれたり、おんぶされて、赤崎の桃原寺に避難しました。私には一ヵ月の赤ちゃんがいたので、「少し雨が小降りになってから、助けに来ます」と言ってくださいました。しかし、雨はドンドンひどくなるばかり。残ったのは、九十歳のおばあさんと、一ヵ月の赤ちゃんと、二十三歳の私。出ないオッパイの先をくわえさせ、悲しく涙を流し、泣くばかり。おばあさんも疲れて涙を流し、暗い所で三人しっかり抱き合って、祈るだけでした。

大雨大水の中をイカダで助けに来ていただき、消防団の人にいただいた毛布に包まれ、桃原寺に着いた時には、赤ちゃんは体全体が冷たくぐったりしてしまっていました。口からはカニのように白いアワを出していたので、私は頭の中が真っ白になり、体全体がガタガタ震え、ただ祈るだけ。しかし、ストーブをつけていただいたり、温めて少しずつ元気を取り戻すのを見るにつれて、私も元気になりました。ここで、母と姉にも合流でき、本当に言葉にならないほ

遺体安置所の安勝寺で、肉親を捜し求める人たち。
7月27日ごろ

救護所に早変わりした諫早警察署の２階　7月26日早朝

競馬場（今の競技場）で遺体を火葬していた。
あまりに多くの犠牲者に悲惨な状況だった

雨が上がって復興へと…

眼鏡橋は山のような流木で覆われていました。また溢れないようにアーチ下を早めに撤去したので、半月後には浸水の恐れもなくなりました。

岸辺の石垣や河原に干す洗濯物は、市民が復興へと立ち上がる毎日の姿でした。

ど、生きて会えたことを嬉しく思いました。

何もかも水害で流されてしまい、大事に持ってきたものといえば、長女の臍の緒と母子手帳、オムツの着替えだけでした。お産まもない中で大水害に遭い、命からがらの思いをしました。赤崎の実家は、屋根が少し見えるくらいに水没してしまいました。今、思い出しても涙が溢れ、上手く伝えることができません。

赤崎町の消防団の人、たくさんのみなさまに助けていただいたことは一生忘れることはできません。本当に大変お世話になり、感謝の気持ちで心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

子どもたち、孫たちにも「物は大切に大事に使い、ありがとうという感謝の気持ちを絶対に忘れないように」と言っております。諫早大水害で亡くなられたたくさんのみなさま方のご冥福をお祈りいたします。

自衛隊の組み立て式野外風呂に入る子どもたち。笑顔が戻ってきました（天祐寺）

自衛隊は真っ先に水の確保を行いました。大村の自衛隊がろ過器を運び、泥水からきれいな飲料水を作り、給水車で被災者に配りました。それは、人々に生きる勇気を与えてくれる水でした。破壊された水道施設は、８月３日にはほとんどが復旧しました。

復興

多くの人々の支援と温かい心が諫早の復興を助けました

被災4日後から出動した自衛隊の機動部隊２千名は、まず道路上の家や流木の除去にかかり、10日後には一応歩いて通れるようになりました。ところがこのあと家の中に堆積した土砂・流木・濡れた畳などが続々と道路に運び出されるので、自衛隊の機動力もこの排土を持て余していました。

被災者を希望へと導いた自衛隊のめざましい活躍

局地的集中豪雨のため多数の死傷者を出した諫早水害のニュースは、すぐに中央に報ぜられました。水害翌日の26日に開かれた閣議では、政府も災害救助法の発動その他の救済措置につき、万全を期するように申し合わせたのです。かつてない甚大な被害に、国はもちろん、県や市、そして県外からも消防団、青年団、婦人会、教職員団体など様々な団体が救助に駆けつけました。

中でも、陸海空自衛隊の時を移さぬ迅速な出動ぶり、救助作業にはとても力強いものがありました。水害の一報が伝わると、自衛隊大村部隊を先頭に九州管区の各部隊が続々と到着。地獄絵巻を展開している諫早の街で、迅速に的確な救助活動を行いました。7月26日より8月18日まで実に延べ52,639名の自衛隊員が諫早救援に出動しています。彼らは何よりも人命救助を最優先に、遺体捜索、救援物資輸送、給水作業、防疫活動、排土作業、流木撤去…と、大混乱に陥った街を復興へと導きました。その偉大な成果を目の当たりにした被災者たちは、復興へと立ち上がる意欲をかき立てられたといいます。

人々の心の糧となった全国からの励まし

民間からも多くの温かい手が差しのべられました。長崎のある女性教師たちは、家や家族を失った子どもたちを慰めようと人形芝居を企画し、理容師組合の人々は避難所で理髪の無料奉仕を行い、長崎市婦人会は3万個のおにぎりを届けました。このように、26日から9月10日の長期にわたり、延べ9,218名の民間団体が炊き出しをはじめ、排土作業、流木撤去、清掃作業等に献身的な奉仕を行ったのです。

新聞やラジオ、テレビなどで被害の模様が伝えられると、日本全国から、また遠くは海外40ヵ国から真心のこもった救援金や救援物資も届けられました。諫早災害対策本部へ直接寄贈された義援金だけでも11,911,000円にも達し、人々を救ったのです。家屋を流され、家財道具を濁流に持ち去られた市民が身にまとっているものといえば肌着だけ。夏とはいっても、朝方の寒さは空腹の人々にとって相当な苦痛であったことでしょう。そこに、食料や飲料水と共に衣料品や寝具、鍋やバケツなど、温かい品々が届けられ、被災者の心をも救いました。

寄せられた物資だけでも230万点を超えました。

3週間の献身的な救援活動を続けた自衛隊は、8月18日に多くの市民から感謝と感激の万歳に送られて、引き揚げました。写真は、市民と共に自衛隊を見送る野村市長。

野村市長はその後、被害拡大の原因とも言われた眼鏡橋の爆破に反対し、文化財としての保存を提案。猛反発にあいながらも、「50年後の孫子の代を考えれば、市の象徴である眼鏡橋保存が大事」と中央の政治家に働きかけ、石橋としては前例がない国の重要文化財指定第一号を勝ち取りました。